

疑問文文末表現の「ノカ」 「rǔ:」 「rǔ:plà:w」について

カノックワン・ラオハブラナキット

【キーワード】 ノカ rǔ: rǔ:plà:w 背後の事情 確定している情報

1. はじめに

日本語とタイ語はどちらも、文末に一定の形式を付加することで疑問表現を作ることができる。こうした共通するプロセスで両言語の疑問文文末表現は作られるので、おおよその対応関係は見つけやすいのだが、それは必ずしも単純なものではなく、両言語の学習者にとってもその習得は決して容易なものと思われない。二つの言語を取り上げ対照するとき、必ずこのような似て非なるものに突き当たる。そうしたものを一つ一つつまびらかにしていくことは学習者に対して有意義な情報を提供することにつながるはずである。

そこでここでは日本語の疑問文文末表現の様々な形式の中の一つである文末の「ノカ」（ノデスカ、ンデスカ、ノ?<?は上昇調イントネーションを指す）も含める—以下これらをまとめて「ノカ」（注1）とする—、それと一般的な対応を示すと考えられているタイ語の疑問文文末表現の「rǔ:」（rǔ:, rǔ:, rǔ:, rǔ: も含める—以下これらをまとめて「rǔ:」とする—）を取り上げる。両者は次のように対応している。

1) 魚釣りに行かない? (サラピー、p.17)

mái paj tòkpla: rǔ: (Suan, p.13)

否定 行く 釣り 疑問(注2)

しかし、「ノカ」は必ず「rǔ:」に対応するわけではない。次のように「rǔ:plà:w」が使われている文でも日本語に訳すと「ノカ」になる。

2) ニンは部屋の隅で足をかかえ込むように丸くなって座っていた。

(注1) 田野村(1990)は「ノカ」は「ノダ」の疑問文における形であるとし、「ノデアル」「ノデス」「ノデゴザイマス」「ンダ」「ンデス」などを「ノダ」の文体的な変異形、同様に「ノデスカ」「ノデゴザイマスカ」などを「ノカ」の変異形であるとしている。また、文末の「ノ」については、その働き(本稿で後で扱う<背後事情>を示す働き)や奥津(1964)の論証から「ノダ」の一つの形であるとしている。本稿でもこれに従う。

(注2) 本稿では、タイ語の例文中に以下のような略語を使用する。

疑問 = 疑問助詞

終 = 終助詞

また、丁寧さ、親しさを表す終助詞「khráp」「khà?»「há?»「cá?»以外の終助詞が疑問助詞の後に伴う場合には別の意味になる可能性があるので、本稿はそういう例を扱わないようにする。

“pen àʔraj rǔ:plà:w” phǒm thǎ:m (Wee, p. 122)

状態動詞 何か 疑問 僕 尋ねた

「どうかしたノ？」と僕は尋ねた。

また、次の表現は、「ノカ」が使われているが、「rǔ:plà:w」、「rǔ:」を使って訳すことができず、「断定文」となる。

3) 何だ、やっぱり負けたノカ。

4) thò: núk' lé:wchi:aw wâ: tǒŋ pé:

何だ そう思った (やっぱり) と 推量 負けた

このように、日本語の疑問文文末表現「ノカ」とタイ語の「rǔ:」は単純な一対一の対応関係を示してはいない。このことは両言語の対応関係は形式によって表現に付加される性質や機能を考慮しなければ明らかにできないであろうことを示唆しているように思われる。そこで、本稿は二つの視点からこれらの形式の性質や機能を分析し、その対応関係を考察することにする。二つの視点とは、疑問表現という視点と、「ノダ」の変異形としての「ノカ」という視点である。

2. 疑問表現という視点から見た「ノカ」と「rǔ:」の性質

仁田 (1991) は、疑問表現には<疑い>、<問いかけ>、<働きかけ>という三つのあり方があるとする。本稿でもこれらに注目し、それを文末表現形式の現れる疑問表現が持つ性質、すなわち文末表現形式の性質として捉え、<疑い性>、<問いかけ性>、<働きかけ性>とし、次のように定義する。

I <疑い性>とは、「話し手にとって不明な部分があることを示す性質」である。そして、この性質は聞き手の存在を特に要求しない。

II <問いかけ性>とは、「聞き手に対して、話し手の知らない情報や聞き手の判断を求めるという性質」である。そして、これは聞き手の存在を積極的に必要とする性質である。

III <働きかけ性>とは、「話し手の持つ要求が聞き手の行為で表現するように話し手が聞き手に働きかけ訴えかける性質」である。そして、これも聞き手の存在を積極的に必要とする性質である。

2. 1 「ノカ」と「rǔ:」が共通している性質

本来の疑問表現は、<疑い性>と<問いかけ性>の両方を持っている。というのは、<問いかけ性>は、聞き手に対して、話し手の知らない情報や聞き手の判断を求めるという性質であって、「話し手にとっての不明な部分<疑い>」を前提とするからである。話し手にとっての不明な部分<疑い>がなければ、聞き手からの情報や判断を求めない必要がないのである。したがって、<問いかけ性>があると、<疑い性>があるということになる。

<疑い性>と<問いかけ性>を持っている本来の疑問表現には「ノカ」も「rǔ:」も現れることができる。ここではこれを「通常疑問表現」と呼ぶことにする。

5) 出て来るリカ、永尾、さとみ

リカ : 「じゃ、私ここで。」

永尾 : 「じゃあー。」

さとみ : 「まだ仕事残っているノ?」

リカ : 「ううん。」 (東京、p. 35)

6) “phǒm cá? kláp lvj ná? há? phô:”

僕 未来 帰る 終 終 終 お父さん

“mi: thú?rá?pá?paŋ saláksámkan á?raj rǔ?(rǔ:)” (Weng, p. 250)

ある 用事 大切 何か 疑問

(「お父さん、僕はそろそろ帰りますよ。」

「何か大切な用事でもあるのか。」)

5)には、「まだ仕事が残っているかどうか、話し手が判断できない」という意味合いがあり、6)には、「聞き手に何か大事な用事でもあるのかどうか、話し手が判断できない」という意味合いがあり、いずれも「話し手にとっての不明な部分」、すなわち<疑い性>のあることを示している。さらに、5) 6)は、「話し手は聞き手から情報・判断を求める」という意味も持っている。このことを検証するために、「～と尋ねる/～と聞く」と「～ thǎm wá: (と尋ねる)」という強い<問いかけ性>を持つ動詞をつけてみる。

7) 「まだ仕事残っているノ?」と尋ねた/聞いた。

8) khǎw thǎm wá: “mi: thú?rá?pá?paŋ saláksámkan á?raj rǔ?(rǔ:)”

彼 尋ねた とある 用事 大切 何か 疑問

(「何か大切な用事でもあるのか」と彼は尋ねた。)

いずれも自然なので<問いかけ性>も持っていると考えられる。また、5)と6)のような例の他に<疑い性>と<問いかけ性>を持っている「ノカ」と「rǔ:」がある。

9) ひらり : 「私、帰る。」

一恵 : 「え? 帰るノ?」 (ひらり I、p. 37)

10) “raw rákkan ná? khráp.”

私達 愛しあっている 終 終

“rák rǔ:.” (Khee, p. 85)

愛している 疑問

(「私達は愛しあっていますよ。」「愛しているって?」)

9) 10)はいわゆる「問い返し表現」で直前の発話の全部または、一部を繰り返して相手に尋ねる表現である。5) 6)と同じように<疑い性>があるが、その疑いの所在は異なる。5) 6)では「話し手の判断にある不明な部分<疑い>」であるのに対して、9) 10)では、相手の発話の意味する所の真意・妥当性が、話し手にとって分かりかねるといった「相手の発話にある不明な部分<疑い>」である。

また、ここで「ノカ」と「rǔ:」の<問いかけ性>検証のため、9) 10)にそれぞれ「～と尋ねる/～と聞く」と「～ thǎm wá: (と尋ねる)」を付けた文を想定すると、これらも自然であるので、<問いかけ性>

もあることが分かる。

5)~10) の例では、「ノカ」と「nú:」が<疑い性>と<問いかけ性>を持っているが、<働きかけ性>についてはどうであろうか。これらの例では、話し手の持つ要求が聞き手の行為で実現するように話し手が聞き手に働きかけたり訴えかけたりしていない。例えば、「~と誘う、~と勧める、~と頼む、~と命じる」、「~pútchuan wá: (と誘う・勧める)、~khǒ:roj wá: (と頼む)、~sǎj wá: (と命じる)」などの「相手の行為を求める」意味合いを持っている動詞を付けてみると、5)~10)の例では不自然なものになる。したがって、<働きかけ性>は持っていない(注3)と判断できよう(注4)。

2. 2 疑問表現という視点から見た「ノカ」と「nú:」の違い

11) 向かいの部屋のドアが開き、女が大きな青い鞆を背負って出て来た。

「行くノカ」男が呟いた。

11)は、誰かに向かって言ったものではないので<問いかけ性>と<働きかけ性>は持っていない。<疑い性>についてはどうであろうか。この場合の「ノカ」の持つ<疑い>は、前述の「通常疑問表現」や「問い返し表現」と異なっている。ここでの<疑い>は、発話前に、話手にとっての不明な部分が存在していたが、発話終了時にはその不明な部分が明らかになるというタイプのものである。仁田はこれを「自問納得」と呼び、話し手に不明であったことがなければならぬところが判断文と違うところであると述べている(仁田1991:147)。すなわち、「行くノカ」といった形を取ることで事実と対照し「行くか、行かないか」という<疑い>を解消するものなのである。11)から「ノカ」を除くと、不自然になってしまうので、この「ノカ」には<疑い性>があると考えられる。このような「ノカ」の現れる表現を「自問表現」

(注3) 「ノカ」と「nú:」は<働きかけ性>を持つことはないという主張になる。そうすると、例えば「本当に行かないノ?」や「máj paj cǐrcǐj nú: (本当に行かないの?)」というような勧誘的な働きかけ性があるのではないかという反論が出てくるかもしれない。ただし、これは相手の意志を知っているがらむりやり誘うような表現だけであって、相手の意志を確認することで副次的に勧誘の意味が生じるもので本来的な「勧誘」ではない。また、例えば「*よかったら、行かないノ?」または「*thá: yaj ɲaj máj paj nú: (よかったら、行かないの?)」や「*すみません、もう一度作り直してもらえるンデスカ」または「*khǒ: thót chū:aj tham mǎj ik khrǎj dǎj nú: khá(すみません、もう一度作り直してもらえますか)」のように本来的な勧誘を表す「よかったら」「thá: yaj ɲaj」や本来的な依頼を表す「すみません」「khǒ: thót」と一緒に使われることができない。このことから、「ノカ」と「nú:」は<働きかけ性>を持っていないと考えられる。

(注4) <働きかけ性>を持つ表現では、仁田(1991:158-160)が指摘したように、未実現のものしか扱うことができない。また、<働きかけ性>があるためには、まず疑問表現中の述語動詞が意志動詞であり、主語は一、二人称であるという限定が必要である。このことから、一、二人称を主語とした意志動詞を述語動詞にしていない5)のような例では形式から<働きかけ性>を持っていないと考えられる。

と呼ぶことにする(注5)。

11)に「nǔ:」を用いてみると、

12) “khǎw cá? paj nǔ:”

彼女 未来 行く 疑問

これは、聞き手に対する発話になり、「行くかどうか」という情報を求める表現である。

では、「自問表現」は、タイ語ではどのようになるのか、11)をタイ語に訳してみる。

13) “khǎw cá? paj ciŋciŋ dǔaj”

彼女 未来 行く 本当に 終

このように「nǔ:」または他の疑問助詞(注6)が現われない「断定文」となる。11)の訳は他にも可能性がある。

14) “khǎw cá? paj nǔ: nǐ:”

彼女 未来 行く 疑問 終

14)には「nǔ:」が文中に現われているが、「nǔ:」だけではなく「nǔ: nǐ:」で表されている。「nǐ:」を除くことはできない。「khǎw cá? paj nǔ:」だけで発話すれば、「(彼女は)行くの?」となり、聞き手に尋ねる表現になってしまう。

以上より、<疑い性><問いかけ性><働きかけ性>という性質と「ノカ」と「nǔ:」という形式を見ると、「ノカ」は<疑い性>だけを持つことができるのに対して、「nǔ:」は<疑い性>だけを持つことができないことが分かる。<疑い性>だけを持つ表現は「自問表現」であるが、この表現に現われないということは「nǔ:」が聞き手の存在を積極的に必要とする疑問文文末表現であることを示していると思われる。

3. 「ノカ」と「nǔ:」の共通している機能

3. 1 「ノダ」の変異形としての「ノカ」という視点から見た「ノカ」の機能

「ノダ」の変異形である「ノカ」は、準体機能を持つ「ノ」が先行する節を体言化し、それに「カ」がついた形である。つまり、準体機能を持つ「ノ」に疑問文を作る働きを持つ「カ」を加えたものである。そして、この体言化によって、「ノカ」の基本的な文形は、「Pは - Qノカ」という題述文の後半の形となる。「Pは - Qノカ」のPは、その発話場面の発話者の関心の対象となる先行文脈や状況をさし、「ノカ」は、その先行文脈や状況Pを受けて、Pの「背後の事情」を表したり尋ねたりする機能を持つ。

(注5) 先行研究ではこのような表現を様々な名前で呼ばれてきた。例えば、「自答」(国立国語研究所1951)「詠嘆」(吉川・鈴木1969)「自問納得」(仁田1987, 1991)「疑問型情報受容文」(森山1992)である。

(注6) 「nǔ:」を「疑問・質問」という意味を持つ「疑問助詞」と位置づけた研究が多く見られる。その例は、Santaputra (1980), Peyasantiwong (1981)などである。本稿もそれに従うことにする。

つ。つまり、「Q ノカ」は、ある先行文脈や状況 P を受けて、P の背後にあるのは Q というのか、と表したり尋ねたりするのに使われる (cf. 田野村1990, 1993)。

15) みのり : 「お見合いでもしようかな。」

ゆき子 : 「結婚したい?」 (ひらり I, p. 65)

ここでは、「みのり」が言った「お見合いでもしようかな。」を聞いた「ゆき子」が、その先行文脈を P として (頭の中で) 受けて、そして、その P の背後にある事情は「結婚したい」ということかと、「みのり」に尋ねていると考えられる。このように、「ある先行文脈 P を受けて、P の背後の事情を表したり尋ねたりする」のは「ノカ」の大切な機能である。以降、この機能を<背後の事情>と呼ぶことにする。

3. 2 「rǔ:」の機能

Kullavanijaya (1980:48-52) は、「rǔ:」を他の疑問助詞「mǎj」と「rǔ:plǎ:w」と一緒に考察し、「mǎj」と異なり「rǔ:」と「rǔ:plǎ:w」が現れる疑問文には、話し手が何らかの事実・根拠 (asserted fact) に基づいて発話したという意味合いがあるとしている (注 7)。そこで、「rǔ:」の機能を考察してみよう。

16) ヨシ医師は帽子を手にとって、静かに立ち上がった。それを見たオーンは言った。

“cǎ? klǎp rǔ: khǎ? mǎ:” (Khuu, p. 88)

未来 帰る 疑問 終 先生 (呼びかけ)

(「先生、帰るんですか。」)

話し手のオーンは、「聞き手の先生が帽子を手にとって、静かに立ち上がった」という状況を P として (頭の中で) 受けて、そして、その P の背後にある事情は「帰る」ということかと、聞き手に尋ねていると考えられる。このように、「rǔ:」は「ノカ」と同じように<背後の事情>という機能を持っていると言えそうだ。

しかし、Kullavanijaya が示したように、「rǔ:plǎ:w」にも「rǔ:」と同じ機能がある。

17) “du: sǐ? cǎ? cha:kri:, du: phǔ:chaj khonnán sǐ?, khǎw mǎ:ŋ

見る 終 終 人名 見る 男 あの人 終 彼 注意して見る

cha:kri: yǎj tsj, nǔ:cák kan rǔ:plǎ:w” (Phrung, p. 100)

人名 よく 終 知る 互いに 疑問

(注 7) しかし、「rǔ:plǎ:w」が現れる疑問表現は「rǔ:」と全く同じではないと考える。これについては4. で述べることにする。また、「rǔ:plǎ:w」は「rǔ:」と違ってすべての場合において話し手が発話前に何らかの事実・根拠を受けているという意味合いがあるとは限らない。「rǔ:plǎ:w」が「mǎj」と互いに取り替えられるという立場に立っているのは Peyasantiwong (1981) などに見られる。本稿では、「rǔ:plǎ:w」に関しては、Panthumetha (1982) と同様、話し手が発話前に情報を受けていないという前提において使われる場合と、発話前に何らかの情報を受けたという前提を示す機能を持って使われる場合の二つがあると考えられる。

(「見てよ、チャーリー、あの男を見て、彼はあなたをずっと見ているよ、知ってるの? (知り合い?)」)

17) の話し手は、「その男」が「チャーリー」を見ているという状況を、P として受けて、その P の背後の事情にあるのは、「チャーリー」が「その男」を知っているということか、と尋ねている。この場合の「rǔ:plà:w」は「rǔ:」と同じ様に、<背後の事情>という機能を持っている。この二つの形式の違いを4. で述べることにする。

4. 「ノカ」と「rǔ:plà:w」と「rǔ:」

4. 1 「ノカ」と「確定している情報」

井上(1991)は、状況や先行文脈によって示された確定している情報を対象とした疑問文を「受信情報の疑問文」と呼び、「発話直前に見て(聞いて)知らされた情報」いいかえれば「外から与えられた確定的な情報」(受信情報)を疑問の対象とするような疑問文であると説明して、次のような例を示している。

(a) [さがしていた太郎を見つけて] ここにいたんですか? さがしたんですよ。

そして、この疑問文は次のように書き換えることはできないとしている。

(b) * [さがしていた太郎を見つけて] あ、ここにいたんですか? それともここにはいなかったんですか? さがしたんですよ。

本稿でもこのような場合「確定している情報」を疑問の対象とする疑問文として捉える。日本語では「確定している情報」であろうとなかろうと状況や先行文脈を受けての疑問文では「ノカ」形式だけしか用いられない。しかし、タイ語では次に述べるように「確定している情報」か否かによって形式的な対立がある。

4. 2 「rǔ:plà:w」「rǔ:」と「確定している情報」

まず、「rǔ:plà:w」の形式的な意味の説明から始める。「rǔ:」は疑問助詞と同時に、英語の“or”に相当する選択を表す接続詞でもある(例えば、dam rǔ: khǎ:w(黒かあるいは白))。そして「plà:w」は、文全体の否定要素(注8)である。

こうした「plà:w」の意味によって、「rǔ:plà:w」には、「rǔ:」と異なる使用制限がある。すなわち、「rǔ:plà:w」を用いる時、話し手は(～(の)か(注9)、それともそうじゃない(の)か)という意味合いで

(注8) Santaputra (1980:102)の用語。“「plà:w」 is a negative pro-form, which stands for the whole negative statement.”と指摘している。

(注9) ここで「(の)か」の「(の)」を()にしたのは、注7で示したように、「rǔ:plà:w」はすべての場合において話し手が発話前に何らかの事実・根拠を受けているという意味合いがあるとは限らないからである。

尋ねていると思われるのである。したがって、こうした意味合いのない次の場合には「rǔ:plá:w」を用いることができない。

18) (男が女の所を訪ね、玄関まで来た。女は男を見て言った。)

* “áw! ma: ik lé:w rǔ:plá:w khá?”

あれ! 来た また 完了 疑問 終

(あれ! また来たんですか?)

19) “khu: yù: káp fæ:n, díaw khǎw khoŋ kláp cək tá?lát”

先生 (自称) 住む ~と 恋人 もうすぐ 彼女 だろう 帰る から 市場

* “khu: mi: fæ:n lé:w rǔ:plá:w há?”

先生 (呼びかけ) いる 恋人 完了 疑問 終

(「先生は恋人と住んでいるんだ。多分彼女はもうすぐ市場から帰ってくるだろう。」)

「先生はもう恋人がいるんですか?」

18) 19)では「男が女の所に来ている」という状況 P や「先生は恋人と一緒に住んでいる」という先行文脈 P が話し手に対してはっきりと示されている、「確定している情報」であり、それぞれ「あれ! また来たんですか。それともそうじゃないんですか」、「先生はもう恋人がいるんですか、それともそうじゃないんですか」と書き換えることはできない。したがって、このように「確定している情報」を疑問の対象とする場合「~ (の) か、それともそうじゃない (の) か」という不確定の意味を持つ「rǔ:plá:w」を用いると不自然になるのである。しかし、18) 19)の「rǔ:plá:w」を「rǔ:」に代えると自然な文ができる。したがって、「rǔ:」は、状況や先行文脈 P が「確定している情報」の場合でも用いられることが分かる。また、「問い返し表現」は、先行する文脈 P が話し手の発話直前に明確に確定している表現なので、それを受けて「~のか、それともそうじゃないのか」という意味合いで問い返すことができないので、「rǔ:plá:w」は「問い返し表現」に現れることはない(注 10)。

5 まとめ

以上の考察をまとめたものが(表 1)である。以下、この表にしたがって結論を述べることにする。

(注 10) 日本語では、「問い返し表現」を作る形式に「ノカ」の他、「ッテ?」や「文末に何も付けない上昇調のイントネーション」がある。しかし、タイ語では、イントネーションを変えて疑問表現を作ることができないので、「問い返し表現」の場合には必ず「rǔ:」を使う。

日本語 の形式	タイ語 の形式	性質			表現	機能 背後の事情	意味	使用条件
		疑い性	問いかけ性	働きかけ性				
ノカ	断定文	+	-	-	自問表現	+	不明であったことが発話終了時に明らかになって受け入れられる独り言の表現	背後の事情を了解している表現
	rŭ: nŭ:							
ノカ	rŭ: plə:w				通常疑問表現	+	状況や先行文脈を受けてその背後の事情について尋ねる表現	確定していない情報
	rŭ:	+	+ #	-				確定している情報
ノカ	rŭ:	+	+ #	-	問い返し表現	+	直前の発話にある内容や妥当性の把握できない不明な部分を問い返し表現	-

「通常疑問表現」は疑いが話し手の判断にある<疑い性> 「問い返し表現」は疑いが相手の発話にある<疑い性>

まず、性質と形式を見ると、日本語の「ノカ」は<疑い性>だけを持つことができるのに対して、タイ語の「rŭ:」は<疑い性>だけを持つことができないことが分かる。<疑い性>だけを持つ表現は「自問表現」であるが、この表現に現われないということは「rŭ:」が聞き手の存在を積極的に必要とする疑問文未表現であることを示していると思われる。

また、<背後の事情>の機能と形式を見ると、「ノカ」と「rŭ:」は同じようにこの機能を持っている。そして、「rŭ: plə:w」もこの機能を持っている。しかし、状況や先行文脈を受けてその背後の事情を尋ねる時でも、「確定している情報」を受けた場合には「rŭ: plə:w」が使えない。「rŭ:」にはこうした条件はない。このように、「rŭ: plə:w」「rŭ:」には使い分けが見られるが、日本語には「ノカ」の形式しかないので、タイ語のような使い分けを見ることはできない。

最後に「rŭ: plə:w」「rŭ:」と「ノカ」の対応関係から、日本語の「ノカ」は表現範囲が広く、タイ語の「rŭ: plə:w」「rŭ:」に比べ多義的であると考えられる。

【例文出典】

日本語 サラピー = 吉岡峯子訳『サラピーの咲く季節』1983段々社、東京 = 坂元裕二『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』1991小学館、ひらりI = 内館牧子『ひらり(1)』1993 講談文庫

タイ語 Khee = “Kheehaat daaw” Vanich Carungkit'anant 1983 Buura'phaa'saan, Khoo = “Khukaml” Thommayantii 1969 Ruamsaan, Phrung = “Phrunniica'khlaajsaaw” Uppatham Kongkeaw 1990 Muk'ciin, Suan = “Suansat” Suwannee Sukhontha 1983 Rungruangrat, Wee = “Weelaa nai khuatkeaw” Praphatsorn Seewikul 1989 Doak'yaa, Weng = “Weng'ra'kam” Kritsa'naa Asooksin 1992 Maa'heet

【引用文献】

井上優 1991 「受信情報の疑問文」『日本語シンポジウム・言語理論と日本語教育の相互活性化予稿集』35-41 津田日本語教育センター

奥津敬一郎 1964 「『の』のいろいろ」『口語文法講座 3 ゆれている文法』 明治書院

国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞 一用例と実例一』(国立国語研究所報告 3) 秀英出版

鈴木舟士郎 1969 「の — 終助詞 <現代語>」松村明(編)『古典語・現代語 助詞助動詞詳説』679-681 学燈社

田野村忠温 1990 『現代日本語の文法 I — 「のだ」の意味と用法』 和泉選書

田野村忠温 1993 「『のだ』の機能」『日本語学』12:34-42

仁田義雄 1987 「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』 大学書林

仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

森山卓郎 1992 「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』10:44-56

吉川泰雄 1969 「か — 終助詞 <現代語>」松村明(編)『古典語・現代語 助詞助動詞詳説』615-622 学燈社

Kullavanijaya, Pranee. 1980. Phuuphuu kap prayok khamthaam beab toabrap-patiset. (話し手とyes-no 疑問表現). Waarasaan Aksoanrasaati:46-53.

Panthumetha, Nawawan. 1982. Wajyakoan Thai (タイ語の文法). Rungruangsaan.

Peasantiwong, Patcharin. 1981. A study of final particles in conversational Thai. Michigan, U.S.A.: University of Michigan dissertation.

Santaputra, Sirinee. 1980. Presuppositions in Thai yes-no questions. Working Papers in Linguistics, University of Hawaii. 12:93-113.